



吉良川の町並み 2014年9月6日



吉良川は重伝建地区

高知県室戸市吉良川^{きらがわ}では、雨が横から降る、と言われる。年間3000～4000ミリの大雨が降り、高温多湿・多雨強風という環境にある。その厳しい自然条件下で生まれたのが「水切り瓦」「土佐漆喰」「いしぐろ」（石垣）である。

■水切り瓦



土佐漆喰の白壁に水切り瓦が2層、3層、4層

吉良川は、近世に豊富な森林資源を活かした木材や薪などを京阪神に運んで繁栄した。明治10年頃から木炭の生産がはじまり、大正年間に製炭技術を向上させた吉良川炭（土佐備長炭）を生産し、備長炭の最高クラスの評価を受け、その交易で栄えた。

水切り瓦は、強い風を伴って横に降る雨が壁に直接かかるのを防ぐための小さな庇であり、滝のように流れる雨をカットし、直接地面に落ちるようにしている。母家や蔵の壁に3層、4層の水切り瓦が施され、重厚な町並みを形成している。住まいを守り、長持ちさせる技術であるとともに、何層もの水切り瓦は富の象徴でもある。

■土佐漆喰

土佐漆喰は江戸時代に高知県で誕生した。雨の多い気候に対応した耐久性に優れたものとして生み出された。それは、消石灰に発酵処理した藁スサを混ぜて作られる。一般的な漆喰は麻スサに海草ノリな



どを加えるが、土佐漆喰はノリを使わず、発酵させた藁スサが分泌する糖類がノリの役割を果たす。藁スサを混ぜることにより、粘着力、防水力が増し、雨風に強くなるという。

吉良川は、もともと職人の町でもあり、かつて大工が40人、左官が25人ほどいたが、今は大工は15人、左官は5～6人ほどしかいないという。漆喰仕事も年中あるわけでもないから、他の仕事をして、総じて仕事が少ないので、後継者もいなくなっている現実がある。職人の高齢化と後継不足は、ここ吉良川でも直面した深刻な課題である。

■いしぐろ



いしぐろと呼ばれる石垣の塀

吉良川の町並みは、旧土佐街道に沿う「浜地区」とその北側のやや高台に展開する「丘地区」に分けられる。台風の風当たりがより大きい丘地区では、周囲に“いしぐろ”と呼ばれる石垣の塀を巡らせて強風から家を守っている。いしぐろの石は海岸や河原から運んできたもので、半割りの石や丸石を空積みや練り積みなどで築いている。さまざまな形や大きさ、積み方があり、アートの趣きがある。

まだ夏の射るような陽ざしが残る九月初め、“土佐東方見聞録”の案内に誘われ、高知県の東南端まで足を運んだ時の日記である。

塩見 寛（静岡地区）景観整備機構副代表

